

第4回留学生センターオープンフォーラム

「『留学すれば喋れるようになる』のウソとホント」

渡辺義和氏 講演報告

堀 江 未 来

日時：2005年3月23日 13:30 - 16:00

場所：CALE フォーラム

講師：渡辺義和氏（南山大学総合政策学部助教授）

今回のオープンフォーラムは、派遣留学と語学の関係に焦点を当て、「『留学すれば喋れるようになる』のウソとホント」と題して開催した。留学希望者の中には「留学させれば語学力は向上する」という考え方がよく見うけられる。それはちまたの留学業者によるキャッチフレーズの影響もあり、かなり一般的に信じられている。しかし、留学をすれば自動的に語学力が向上するなどといったことは決してあり得ない。つまり、この「留学すれば喋れるようになる」という命題は「ウソ」である。

語学力向上のためにはそれなりの留學生活の送り方というものがあり、また留学を充実させるためにはそれなりの語学力向上に対する取り組みというものがある。したがって、取り組みさえしっかりしていれば、この命題は「ホント」ともなりうる。今回のオープンフォーラムは、この命題を「ホント」にするためには各自どのような学習への取り組みをすべきかについて、学習者にヒントと希望を与えることを目的とした。

講師には、南山大学総合政策学部助教授の渡辺義和氏を迎えた。講師は、社会言語学者でありかつ英語の教師でもある。また、自身が留学生として数回に渡り留学をした経験や、語学学習が日常的趣味といえるほどのこだわりを持っている背景から、様々な示唆に富んだ講演を聴くことができた。以下、講演内容を簡単にまとめて報告したい。

あなたの留学の目的は？冒頭、講師から参加者に対し、このような質問が投げかけられ、それぞれシートに8つの留学目的を記入する時間が設けられた。様々な留学目的の中でも、「語学力の向上」は、多くの

参加者にとって優先順位の高い目的であることがわかった。

では、「語学ができるようになる」というのは具体的にどのようなことなのか。参加者からは、「無意識に自然にはなせるようになる」「日常会話ができるようになる」「完璧に喋る」「仕事で使え、信頼感が得られる」「わからない言葉が出てきても文脈の中で話ができる」「読み書きではなく、聞いたり話したりできること」「考えていることがお互いに分かること」など、様々なレベルに渡る意見が出された。講師からは、なんとなく意思疎通ができればいいな、というレベルを求めているなら、それは留学すればたぶんできる。しかし、もっと高いレベルを目指して欲しい、との要望が示された。つまり、高いレベルの目的を設定することによって、意気込みが出る。意気込みがあるということこそが語学向上につながるからである。まずは、例えば「1年しか留学してないのに、どうしてそんなにできるの？」と聞かれる位のレベルを目指すような、「欲」を持って欲しいということである。

例えば「英語を話せる」といっても、いろいろな種類がある。例えば 流暢であっても内容がない。また、内容があっても流暢ではない、など。ある程度の流暢さは留学によって何となく身に付けることはできるかもしれないが、流暢であってかつ内容のあるコミュニケーションができることを目指してほしい。

では、流暢かつ内容のある「喋れる」レベルに達するにはどうしたらいいのだろうか。一つには、留学する前の過ごし方が重要である。留学の期間は、現地にいる間だけではなく、行く前から留学は既に始まっている。なぜなら、留学中にのびる語学力は、留学前にどれだけ蓄えられるかによるからである。

講師は、かつて家の中にいるときもずっと辞書を持ち歩いていた。とにかくわからない言葉を思いつければ辞書を引き、待ち時間が数分あれば辞書を読む、とい

う時間の過ごし方をしたという。語学力の蓄積は、まずはどれだけその言語に触れていられるかという時間と情報の量によるというのが重要なポイントである。一方、語学力がのびない最も大きな理由は「やめてしまう」「続けない」というところにある。語学力ののび方は階段状であり、一定のペースでのびるものではない。一定の氷河期があって、しばらく粘ると、ある時ぱっとのびる。その繰り返しを意識して、いくらなのびない時期が続いても、そこでしつこく続けることが肝心である。そのじっくり蓄える時期をまず留学前に持っておくことで、留学中の効率をあげることが可能となる。

受験のための英語の勉強であっても、無駄ではない。なぜならば、その蓄積を使えるように変換することが可能だからである。受験勉強で蓄積した知識は、実際にほとんどは使えるものである。問題は、それを自分の中でどう処理するかである。

では帰国してからはどうか。これも同じで、努力をやめればすぐに力は落ちていく。当然、帰国後も同じように取り組みを続けていかなければならない。言語にもよるが、勉強のための様々な材料を見つけることができるので、積極的に努力を怠らないことが肝心である。それを続けていれば、下がることはないだろう。

言語をその現地で学ぶのと、日本で学ぶのとでは、二つの大きな違いがある。まず一つは、絶対量。その言語に触れる時間や情報量が圧倒的に現地の方が多い。現地では「寝ても覚めてもその言葉に触れている」という状況を、意識すれば簡単に作ることが出来る。

もう一つは、その言語を通して、感情的なコミュニケーションができることである。つまり、言語と感情が連動する瞬間を経験することが出来る。言葉という

のは、人間関係を作るためのツールであり、言語がその役割を果たしていない時は、言語の本当の機能を使っていないことになる。例えば、その言葉を使って誰かに何かを頼んでみる、その結果受入れられた、または受入れられなかったという経験には、様々な感情的な反応が伴う。例えば、恥をかいたときに聞いた言い返しは一生忘れない。留学中に、人間関係を全く作らない環境の中でいくらその言語を勉強しても、語学力が向上することはない。人間関係を構築する中で、言語が感情と引っかかる場所を作れば作るほど、その言葉が身に付くのである。

日本から英語圏に留学する人は多いため、英語圏の留学先では日本語を話す機会が多いという状況はよくある。言語に触れる絶対量を増やすという意味では、それは障害になっている。講師が2回目に留学した時、周りの日本人学生から、「英語が出来るようになりたいけどどうしたらいいの？」という相談を持ちかけられたので、「じゃあ、これからは英語だけで話さない？」という提案を試みた。そして、留学期間中、その親しい日本人学生との間では一切日本語を使わなかった。反感を覚えた人がまわりをいたかもしれないが、とにかく限られた期間に語学力をのばすには、意思が重要であり、そのような環境を作ることが出来たのは、その日本人留学生たちにとっては非常に意義深いものであっただろう。

自分より語学力が上の人と話さないと自分のためにならない、というのは良くある誤解だ。その言語に触れる絶対量を増やすという意味では、相手は問題ではない。自分自身が喋ることのきっかけを作ることが出来ればいい。独り言でも話し続けてみて、自分が何を言えないのかに気づくことも意味がある。



自分の学生の中に、実際留学前から指導をして、帰国後にものすごくのびた例がある。その学生は、留学前から準備の努力はしていたが、さらに、留学中に日本人とも英語を話すということを実行していた。そういう行動をとったことで、日本人グループから奇異な目で見られ、あるパーティに誘われなかったことがあり傷ついたようだ。しかしそこで彼女が気づいたのは、「ということは、つまり、これは自分の計画とおりに進んでるんだ！」ということだった。つまり、一瞬はつらかったけども、長い目で見れば自分の目的は思惑通りに着々と進行していることに気がついたのだった。

「外国語ができる、わかる」というのはどういうことだろうか。私たちは、自分の言語で話を聞いている時、相手が次に何を言おうとしているのか、常に予想しながら聞いている。全部の音を聞いて意味を理解している訳ではなくて、先を常に読みながら聞いている。つまり、人間の言語理解は予測に基づいているということであり、予測ができるためには、その元となる情報を蓄えておくデータベースが必要になる。読めば読むほど、書けば書くほど、予測のためのデータベース情報が増える。その言語でのコミュニケーションにおいて予測が出来るということが、その言語が出来るということになる。

さらに、予測ができるだけではなくて、トピックの関連づけが出来るということも必要である。あるトピックに関して、関連する可能性のあるトピックが頭の中にどれだけあるか。それによって、コミュニケーションのスムーズさが変わってくる。逆にそのトピックの蓄積がないと、話を理解するのが困難になる。

では、予測や関連ができるようになるにはどうしたらいいのか。それは意識することである。聞くときも、ただ聞いているのではなくて、能動的に「聴く」ことが重要である。赤ちゃんが言葉を覚えるプロセスと、大人のプロセスは全く違う。赤ちゃんの方が有利だと

思われていることが多いが、実際は外国語学習に関しては大人の方が有利なことも多い。赤ちゃんが言葉を覚える時の認知レベルは非常に低い状態。一方、大人の場合は、母語が既に出来ていて、認知レベルも非常に高い。概念や言葉の差別化やカテゴリー化などでもできるようになっている。大人の場合は、「説明」ができる。つまり、既に使える知識や認知能力を応用して言葉を取り入れることができる。逆に、赤ちゃんと同じアプローチでやっていると無駄なことが多い。それでもある程度は出来るかもしれないが、赤ちゃんが費やせるような時間は、私たちにはない。効率よくやりたければ、意識をして、すでにある知識や概念、認知能力の蓄積を利用して、言語習得に望むことである。

「発音をどうしたらいいのか」という質問もよく聞かれる。実は、発音も意識で学習できる。赤ちゃんの場合は耳で聞いて音をまねるが、その最初の段階では、必ずしもその音が正しく把握されているわけではない。例えば英語では、thの発音をfと混同するケースも多い。大人にとっては、thの音は歯と舌の間から空気が出てこずれる音とわかっているから、fの音と混同することはない。これは、認知レベルで音の構造を頭で学んでいるからである。発音に関しては、話している人の映像を意識的に見て口の形や動きを理解し、同時に音を聞くことで、正しい発音を理解できる。その言語に対して常に意識して取り組むことで、常に新しい発見があり、それによって自分の言語を軌道修正し続けることができる。

なんとなく外国語ができるというレベルなら、ほとんど誰でも可能だろう。しかし、出来る人から見て「すごい」といわれるほどの、そして仕事で使って差し支えない語学力を身につけるには、意識をして、自分を客観的に見て、目的を忘れずに取り組み、それを継続すること。これで始めて「留学すれば喋れるようになる」ということが言える。

■ 名古屋大学 留学生センター オープンフォーラム ■

「留学をすれば喋れるようになる」のウソとホント

留学をすれば自動的に語学能力が向上する訳ではありません。「留学」をより充実させるためにはどう「語学」に取り組むのがいいのでしょうか。また、「語学」能力をアップさせるための「留学」はどうあるべきでしょうか。社会言語学者である講師の専門的立場から、またご自身の経験から、将来留学してみたいと考えているみなさんへのアドバイスとして、お話をうかがいます。また、実際に自分だけの留学プランを考えてみるコーナーも予定しています。

【講師】 南山大学総合政策学部 助教授 渡辺 義和 氏

【日時】 2005年3月23日(水) 13:30-16:00

【場所】 名古屋大学留学生センター 2階 CALE

【参加】 無料

【申込み方法】

下記の名古屋大学留学生センター海外留学室 HP にて詳細をご確認の上、電子メール、あるいは電話・FAXにてお申し込みください。
(なお、定員(50名)になり次第申込みを締切ります。)

■ホームページアドレス:

<http://www.ecis.nagoya-u.ac.jp/abroad/forum05.htm>

■電話: 052-789-2196 FAX: 052-789-5100

■E-mail: abroad@ecis.nagoya-u.ac.jp

電子メール、FAXでのお申し込みの場合、件名を「留学生センターオープンフォーラム申込み」とし、お名前、ご所属(学校名等)を明記してください。

■問合せ先: 名古屋市千種区不老町

名古屋大学留学生センター海外留学室 堀江未来

【講師プロフィール】

生まれたときから「言語」に興味を持ち、南山大学ではフランス語を専攻。その後アメリカに渡り、ジョージタウン大学では言語学で修士号を、アイオワ大学では言語病理学の博士号を取得。コミュニケーションについて幅広い経験を生かしつつ、社会言語学的アプローチによる研究を進めています。南山大学で異文化間コミュニケーションや英語を教えるほか、異文化間言語コンサルタントとして、また海外作品の台本翻訳者、演技指導者としても活躍中です。

